

《資料館便り》

平成 29 (2017) 年
1 月号

石川町立歴史民俗資料館は、町の文化財保存と活用、町民の教育、学術及び文化の発展を目的に、昭和 49(1974)年秋に開館しました。公的施設としては、県下のさががけの一つです。

○「資料館便り」編集：発行 石川町立歴史民俗資料館
〒963-7845 石川町字高田 200-2 0247 (26) 3768

放射化学の先駆者飯盛里安博士 石川に暮らした飯盛家の人々



↑ 研究棟(「高田様」の東側)前：左から二女・四男・三男・博士(背広姿)・添田少年(地元)・孫・三男妻・二男(S23年)



↑ 戦後開発した人造宝石(石川産の石英が主原料)



↑ 下泉に新築された飯盛邸(愛宕山下、乗蓮寺西側)

いいもりさとやす
○飯盛里安博士(1885~1982)は石川県金沢市出身。東京帝国大学理科大学化学科に進み、同大学院在学中の大正4年(1915)には、旧制第一高等学校の教授に就任。翌年、理学博士の学位を取得、大正6年(1917)9月には、新設された理化学研究所(理研)に入所、以後長きに亘って放射化学やさまざまな元素の研究に取り組みました。この間、大正8~10年(1919~1921)には、イギリスのケンブリッジ、オックスフォード両大学に留学、ノーベル賞を受賞したソッデー教授に師事し研究を一層深めました。日本化学学会会長、日本分析化学学会会長を歴任、わが国放射化学の先駆者、第一人者でありました。

○理研飯盛研究室の移転 アジア太平洋戦争末期、昭和20年(1945)4月、B29による空襲を避けて、理研飯盛里安研究室は東京荒川にあった工場を石川町(現在の県立石川高校・石川町公民館・歴史民俗資料館の敷地内)に移転します。その目的は、軍関係の物品に使用する元素類を石川地方の鉱物から抽出するためでした。石川町は当時すでに、これらの元素を含む「ペグマタイト鉱物」の国内有数の産地として、全国的に知られていました。

○飯盛家の疎開と定住 飯盛家は、昭和20年7月初め

には、全員で石川町に引っ越し、間もなく終戦を迎えます。戦後は、日本人の化学研究にもさまざまな制限が設けられ、博士も放射化学研究の道を断たれますが、その後も石川町に住み続け、下泉(乗蓮寺の近く)に家を新築、石川産鉱物である石英(硅石)や長石を活用した窯業・人造宝石の研究も開始します。飯盛家の疎開は昭和24年(1949)11月まで続きました。

○飯盛家の人々 日本を代表する化学者とその家族が、戦中・戦後、4年間もこの石川の地でどのような暮らしをしていたのか。博士や家族の残した当時の日記、研究記録、書簡、写真、スケッチ等をもとに、現在、橋本悦雄氏(石川町文化財保護審議会委員)がまとめつつあり、近日上梓の予定です。

『ペグマタイトの記憶』(石川町教育委員会発行・当館編集 平成25年刊・平成26年福島民報出版文化賞特別賞受賞)の姉妹編として、どうぞ御期待ください。